

多水者字充之、紀氏說恐不然、又按比女名義未詳、非米非粥之說似不可據信、略中廣韻云、編、燒稻作米、又云、糲、煮米、多水是、編與糲其義不同、此二字連文恐誤、

〔伊呂波字類抄〕飲食、編糲煮米、多水者也、

〔增補下學集〕下二、編糲非粥之義也、

〔書言字考節用集〕服食、編糲、順和名、絹粥、

〔倭訓栞〕前編二十五、ひめ、倭名抄に編糲をよめり、非米の音なりといへり、うつば物語に、こうじにたりとて、御ひめしてまゐると見ゆ、水飯也ともいへり、枕草紙に、みぞひめのぬれたると書り

今俗ひめのりなどいへり、三寶字類抄に絹粥をのりとよめる是也、

〔倭訓栞〕前編二十五、ひめはじめ、倭名抄に、編糲ひめと訓せり、注に非米非粥之義也と見ゆ、集韻云、編者米也、類篇云、煮米爲糲、廣韻云、煮米多水也、なほひめの下に見えたり、饌差類考曰、編糲

は即平生所食の飯の類也、古へたゞ飯と稱するものは、今の強飯是也、又曆家にひめはじめといふ事あり、是ひめを供しはじめし也、

〔類聚名物考〕飲食一、編糲、ひめ

比女は常の飯なり、又案るに、比女の名、古へに聞えしは、清少納言が枕草子に見えたり、また和名抄に編糲の文字を出しぬ、略中とりところなき物、みぞひめのぬれたる、略中みぞひめといふは、

御衣編糲の文字なるべし、今も世にひめのりといふは、姫糊の意にて、ひめはやわらかなるのとへなり、古へも物にひめといふ名有は、みな男雄に對へしものなり、略中強飯に對て弱飯なれば、姫とはいへる也、

〔成形圖說〕五、糲、類篇煮米爲糲、食經作糲法、取蒸米一升、置沸湯、勿令過熟、出著新籬、內是此間の波漉飯ならん、

海人藻芥曰、公家御膳、飯者強食也、執柄家等如此、姫飯全分略儀也、略中この姫飯は今常の飯にて、